

国土交通省大臣官房官庁営繕部建築課監修

構内舗装・排水設計基準及び同解説

平成13年版

社団法人 公共建築協会

1. 4. 3 路床土の分類

路床土は、表 1. 4. 1 のように土粒子の大きさによって砂質土及び粘性土に大別し、粘性土については、含水状態によって更に 2 つに分類する。

表 1.4.1 路床土の分類

分類	土粒子の大きさによる分類	含水状態による分類	特徴
I	砂質土	少ない	大部分が砂分（2.36 mm ～ 75 μ m の範囲）で構成される土である。自然含水比は、20% 以下が一般的であり、手で握っても崩れてしまう特徴がある。まさ土、シラス及び山砂などがこれに属し、CBR は、5 以上が期待できる。
II	粘性土	比較的少ない	砂分が少なく、細粒土（75 μ m 以下が 50% 以上）が多い土である。自然含水比は、40～50% 程度である場合が多く、手で握ると適度な粘性を有する。シルト及び粘質土などがこれに属し、CBR は、2 を超え 5 未満が期待できる。
III		多い	塑性の大きい火山灰質粘性土や有機質土で構成される土である。自然含水比は、50% 以上である場合が多く、手で握ると粘りつく特徴がある。関東ローム及び黒ボクなどがこれに属し、CBR は、2 以下しか期待できない場合が多い。

（注 1）路床土の性質の判定及び分類は肉眼による観察、手指による感触、簡単なふるい分け等によって行うことを原則とする。なお、分類 II であっても含水比が少ない固結粘土等（岩盤状のもの）の場合は分類 I とする。

（注 2）路床土の試料は、雨期または凍結融解期を避けて路床面より下方 30cm 以上深い位置から採取したものとする。

（注 3）分類の判断がつかづらい場合又は分類 III の場合は、路床土支持力比（CBR）試験（JIS A 1211）を実施して確認することが望ましい。

解 説

道路舗装では、路床土の支持力特性が舗装の耐久性に影響を及ぼすので、構内舗装の場合も、肉眼観察か、または簡単な方法によって路床土の評価を行うこととし、「砂利道の瀝青路面処理指針（日本アスファルト協会、昭和 59 年 9 月）」を参考にした分類方法を取りあげた。

路床の盛土厚が少ない場合には、「表 1. 4. 1 路床土の分類」により現地盤の調査を行い、埋戻し土と合わせ舗装厚を決定する。

なお、路床土の分類の判断がつかづらい場合又は分類 III で安定処理の判断がつかづらい場合は、路床土支持力比（CBR）試験（JIS A 1211）を実施して確認することが望ましい。

1. 4. 5 一般的な舗装の舗装厚

一般的な舗装の舗装厚は、施設区分と路床土の分類により地域区分別(一般地域と寒冷地域)に定める。

① 一般地域の舗装厚

一般地域の舗装厚は、図 1. 4. 1 のとおりとする。このうち、アスファルト舗装において、勾配が複雑に交わっている場合など、平坦性の確保に配慮する必要がある場合は、厚さ5cmの基層を設ける。これによって、耐久性の向上、将来のライフサイクルコストに対しても有効となる。また、路床土の分類がⅢの場合は、厚さ15cmのしゃ断層を設けるものとする。

一般地域であっても凍上の恐れのある地域では、図 1. 4. 1 に示す舗装厚と置換え深さとを比較し、舗装厚が小さい場合、その厚さの差だけ凍上抑制層を設ける。ただし、凍上抑制層の最小厚は15cmとする。

単位 (cm)

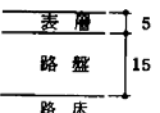
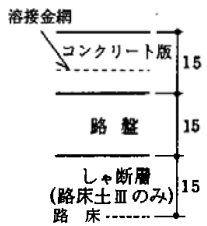
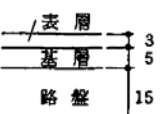
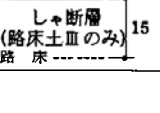
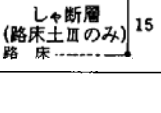
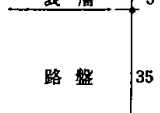
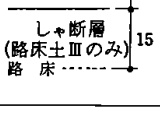
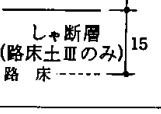
施設区分	路床土の分類	アスファルト舗装		コンクリート舗装
		標準の場合	平坦性の確保に配慮する必要がある場合	
A 一般庁舎	I			
	II			
	III			
B 特殊庁舎	I			
	II			
	III			

図 1. 4. 1 一般地域の舗装厚